妙安寺だより　296号

お彼岸特集号

春分、秋分の日を中日として、その前後七日間を「お彼岸」といい、昼夜が同じ長さの日でもあります。
昔は、この日が祖先の霊魂を祀る日であり、宮中では皇霊祭が行なわれ、民間では家代々の祀りをしました。
仏教が入ってくると、祖霊という祖先の霊魂が来世において、成仏しなければならないと考えるようになりました。
仏教の思想では、万有すべてが仏性を持っていますが、それが仏になれるかなれないかは、遺族の供養と本人の生存中の努力によるものとされ、そのためには、生きているときに良い原因をつくっておけば、良い結果を生むと考えられ、これを「因果」といい、私たちが前世において悪いことをしていると、いくら現世で良いことをしても、前世の悪縁が現世の運命をきめてしまいます。これを「因果の法則」あるいは、「輪廻の法則といいます。
人が死ぬと来世という世界へ行きますが、その途中に恒河（がんが、ごうが）という大きな川があり、その川のこちらの岸を「此岸（しがん）」、向こうの岸を「彼岸（ひがん）」といいます。
彼岸に渡ると、「三途の川原」があって、道案内をする地蔵菩薩が六人います。地蔵菩薩というのは、阿弥陀如来の使者で、今の言葉でいえば、一種のガイドの役目をしています。
そのガイドの地蔵が案内してくれるところは、須弥山（しゅみせん）という高い山で、ここが来世という世界です。
この須弥山をビルに例えると、地下一階地上九階の建物で、来世では、良いことをした者はだんだんと上に行くことが出来ますが、一番上の九階は如来（仏）の世界で誰も行くことはできません。
普通の人は、ほとんど一階（餓鬼界）か二階（畜生界）で「人間の罪業深くして測り知るべからず」と言って、地下（地獄界）へ行きます。
これを判定するのが、閻魔大王で、そこには浄玻璃（じょうはり）の鏡があり、その前に立つと、この世でやった行ないが全部映し出され、上に行くか下へ行くか罪状が決まります。
人が亡くなると、残った人はなるべく彼岸へ無事に渡して、一階でも高いところに行かせてやりたいと願います。
これが死者への最大の供養であり功徳だということを、仏教で教えているわけです。
その最大の功徳というのは、「三宝」即ち、仏・法（仏の教え）・僧（仏の使者）を敬うことです。
しかし、仏は遠くして近寄りがたく、法は深くして知りがたいので、仏と法は非常にむずかしものです。
その点、僧は身近にいるから仏の教えを聞いたり、お経を唱えてもらったりすることができ、また、充分に物を施すことによって、死んだ後は無事に彼岸へ行くことができるわけなのです。
残された子孫は、お彼岸にはお寺に参って、法話を聞き、いろいろな物を供え、お経を唱えることによって、家庭の平和と共に祖先は無事に彼岸に行けるのです。

多　病　息　災

年をとるにつれて、気がかりになるのが健康です。目は悪くなる、耳も遠くなる、歯が抜ける、物忘れはする、足腰は弱くなる、神経痛もひどい、泌尿器も悪くなるなどなど。これでは一病息災どころか多病息災？
良いところを探すほうがむつかしいくらいだ、という人も結構多いかもしれません。
しかし、長年つきあってきた体です。無理をせず、体と対話しながら過ごすことが大事です。
「きしむ門は長持ちをする」といいますから。

春季お彼岸法要の案内

3月17日（火）午前11時より　法華経読誦回向　　3月20日（金）午前11時より　法華経読誦回向
3月23日(月)　午後1時より　春季お彼岸お施餓鬼法要
正午より　オトキ（昼食）　法要終了後　法　話
※なお、卒塔婆供養ご希望の方は、同封の申込書に記入の上、早めにお申し込み下さい。

お知らせ

太歳三カ日・大黒天・星祭り、方除け祈願申し込みの方は、すべてのお札は、各家の位牌堂に安置しております。
位牌堂のない方は、大黒様の前に安置しておりますので、お寺参り、墓参の祭にお持ち帰り下さい。
郵送をご希望された方は、２月３日に発送いたしております。